残業なしでも五十年連続で黒字の会社、従業員の離職率を劇的に改善した外食産業、独自商品で経営安定度を高めた小売店―。八月に連載した企画「大切にしたい会社」では、人や地域にやさしい静岡県内の会社・団体を紹介した。第二弾として、今回も法政大大学院政策創造研究科の坂本光司教授に県内の個性的な会社の一部を挙げてもらい、企業にいま何が求められているのかを考える。

坂本教授お薦め

大切にしたい会社2 in SHIZUOKA

① 長坂養蜂場（浜松市北区）

ぬくもり 顧客に届ける

朝礼で従業員と手をつないで「Bee Happy！」と気勢を上げる長坂善人社長＝浜松市北区で

「Bee Happy！（ビー・ハッピー）」。蜂蜜製品製造・販売の長坂養蜂場（浜松市北区）では毎朝、この合言葉から一日が始まる。ミツバチの恵みを通じて顧客の美容と健康づくりに役立ち、ぬくもりあふれる暮らしを届けるという意味を込めている。朝礼の最後に従業員全員で手をつなぎ、声に出して確認する。

「ぶんぶんファミリー」と位置付けた従業員とその家族の幸せを追求する「大家族主義経営」を実践している。三代目の長坂善人社長（三七）は「職場の雰囲気を良くして、そのぬくもりを顧客や取引先、地域へ広げたい」と狙いを語る。

特徴的なのは、数々のユニークな記念日など福利厚生が充実していること。いい肉の日（十一月二十九日）には三ケ日牛を、クリスマスイブにはケーキをプレゼントし、従業員の家族だんらんを支援。小学生以下の子どもがいる家庭には、長坂社長と弟の恭輔専務（三七）がサンタクロース姿で、プレゼントを配って回る。

従業員と家族の誕生日に有給休暇を必ず取ってもらう「アニバーサリー休暇」のほか、長坂養蜂場の商品券を贈る子育て支援制度もあり、今も増え続けている。健康にも気を配り、自社製品のローヤルゼリーとプロポリスを毎日飲めるようにしているほか、カイロプラクティックによる体のケアも月一回受けられる。

従業員三十九人のうち女性は三十二人、子育て中の母親は十二人いる。長坂社長は「ミツバチも女性社会。家族で集めた蜂蜜で越冬するように、従業員と一つになって会社をつくりたい」と笑顔を見せる。

長坂社長は二〇〇五年、祖父の代から続くこの会社に入社した。「当時はとにかく『お客様第一』で接客や商品に求める基準が高すぎて、ひたすら仕事の内容を変えていた」と振り返る。売り上げは増えたものの、職場は常にピリピリした雰囲気だったといい、精神的に疲弊していった。

「何のためにやっているんだろう」と分からなくなった一〇年二月、坂本光司教授の講演を聞いた。人を大切にする経営が企業を伸ばすことにつながるという内容にそれまでの自身の誤りに気付き、「稲妻に打たれた気分だった」。半年以上かけて経営方針を見直し、身近な従業員を第一に考えるように改めた。

長坂社長は「働きやすさだけでなく、働きがいも重要。そのためにも従業員に成長を実感してもらいたい」と語る。目標達成旅行や期末表彰でモチベーションを高める。定休日の水曜に全員出勤する「ぬくもりの日」には、自己啓発や勉強会も開いている。売り上げは以降、毎年伸びてリピート率が向上している。

長坂社長は「売り上げ拡大ではなく、従業員やお客さんとの縁といったものを大切にし続けられる会社にしたい」と話す。

（山田晃史）

坂本 光司氏（さかもと・こうじ）浜松大や静岡文化芸大の教授を経て、2008年4月から法政大大学院政策創造研究科教授。法政大大学院静岡サテライトキャンパス長、「人を大切にする経営学会」会長。これまでに全国の7500社以上を訪れ、企業の実地調査をしている。「日本でいちばん大切にしたい会社」「さらば価格競争」など著書多数。69歳。焼津市出身。

法政大大学院・坂本光司教授

ここが「一押し」

従業員の8割が女性

浜名湖畔で「三ケ日みかん」を蜜源とする養蜂をしていたが、蜂蜜を使ってあめやラスクといった加工食品を開発し、自社の店舗で販売するようになって大きく成長した。1次産業からスタートし、ある意味で6次産業化のモデルでもある。従業員の約8割が女性で、子育て世代が働きやすい環境が整えられ、従業員のモチベーションの高さが高い顧客満足度につながっている。経営理念は「ぬくもりのある会社をつくりましょう」。この通り経営者と社員が一体の「感動ショップ」だ。